

# 近畿・関西弁地域における標準語形の分布について

——『日本言語地図』50項目の旧国・文化圏による分析——

都 染 直 也

## §0 はじめに

『日本言語地図』(以降LAJ)に基づく、標準語形の全国的分布に関する研究は、河西(1981)が端緒となり、河西・真田(1982)、井上・河西(1982a)・(1982b)など新たな論考が生み出された。

ところで、日本の方言を都道府県単位でとらえ、分析する研究が多くみられる。しかし、それらの中には、たとえば国立国語研究所(2001~2008)に基づく資料があり、都道府県という括りで分析されることがある。同資料は各都道府県で5地点調査された中から選ばれた1地点の資料であり、兵庫県の場合は筆者が担当した「相生市相生<sup>あいおい おう</sup>」が収録されている。しかし、同地は播磨地域の西端に近く、典型的な播磨方言、ましてや、兵庫県方言の代表とは言いがたいものである。

兵庫県は、淡路・摂津・但馬・丹波・播磨という五つの旧国からなる。厳密には、小地域の旧備前地域(赤穂市の一部)・美作地域(佐用町の一部)があり、旧七国からなる全国的にもめずらしい、文字通り多様性を備えた県である。その特性を活かし、兵庫県や地元紙『神戸新聞』では、「五国」をテーマにさまざまな企画を行なっている(これらについては、ホームページ等で容易に検索できるため省略する)。

さて、冒頭の河西(1981)は、同氏の卒業論文の研究成果をまとめたものであり、真田(1979)など、その着想段階から、発展してゆくさまを身近なところで目にしてきた。しかし、当時は筆者自身が母方言(姫路市方言)や周辺方言についての知識が充分ではなかったため、さほど大きな問題意識を持っていなかった。その後、兵庫県をはじめ、周辺地域における方言の調査研究を通して、いわゆる旧国や県等の行政区域内における文化圏が方言分布に大きく影響を残しており、その観点からの研究の必要性を実感するようになった。

本稿では、河西(1981)の着想・方法を踏襲しつつ、「関西弁」と呼ばれる地域(次頁図1、兵庫県但馬を含む)を対象に、新たな視点から分析を試みる。

## §1 方法

研究方法を簡潔に示せば次の3点である。

1. LAJの資料を旧国・文化圏に分けてとらえる
  2. 旧国・文化圏の各地点での標準語回答を数える
  3. 旧国・文化圏内での標準語形分布率を算出する
- これら3点について、具体的に次のように処理した。

1. LAJの資料を旧国・文化圏に分けてとらえる

本稿の「関西弁」地域とは、真田(2018)と同じく次の地域とする(ゴシック体はいわゆる「五畿内」、下線旧国は複数の県・府にまたがる)。

滋賀県・奈良県・和歌山県は、1県1旧国であるため、榎垣(1962)等の先行研究による方言境界線などに基づいて、旧国以外の文化圏を設定した。

大阪府：河内・和泉、摂津

兵庫県：摂津、播磨・丹波・淡路・但馬(方言区画では中国方言域とされる)

京都府：山城・丹後、丹波

滋賀県：湖北・湖東・湖南・湖西

奈良県：大和(国中)・大和(吉野)

和歌山県：紀伊・紀北・紀中・紀南

三重県：伊勢・伊賀・志摩・紀勢(旧紀伊国域)

福井県：若狭(越前地域は対象としない)

2. 旧国・文化圏の各地点での標準語回答を数える

河西(1981)の原則5項目のうち3項目と、標準語形の定義にしたがい、当該語形を拾いだして標準語回答を数える。

①語中語尾の「ガ」行子音は、g, ŋ, ˘gのいずれをも採用する。

②「チ」「ツ」には、TI, TUの音も含める。

③「セ」には、SHE, HYEの音も含める。

なお、関西圏では、拍内下降を持つアクセント型の語末が長音表記されている可能性があるため、本稿でそれらを新たに④として標準語形とする。

④拍内下降に伴うと考えられる語末長音(例「187哇」AZYEE)。

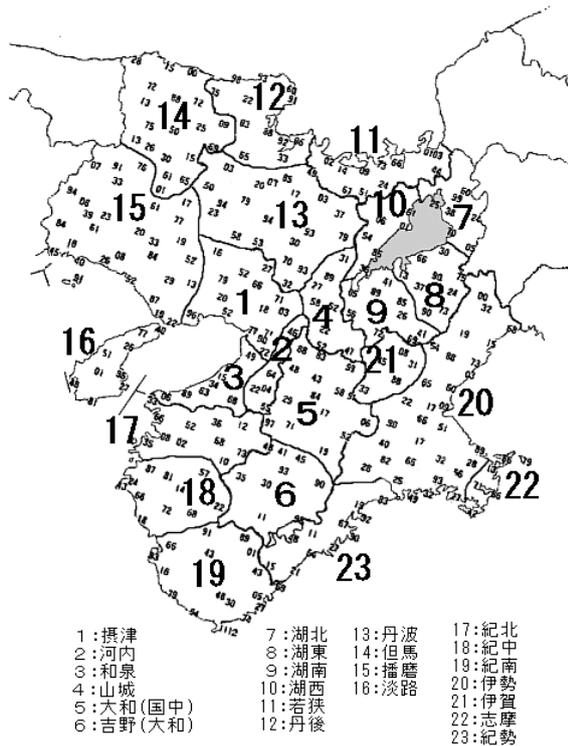


図1 調査対象地域, 旧国・文化圏調査地点  
(LAJ「参考地図I調査地点番号地図」を改編)

### 3. 旧国・文化圏内での標準語形分布率を算出する

①河西(1981)同様, 標準語(標準語形)の回答(分子)は単独回答・併用回答を問わない。

②分母となる地点数については, N(無回答)は加え, 無記号(資料なし)は加えない。

③複数地図にわたる下記の項目は, 当該地図すべてで回答の有無・内容を確認した。

おんな(137・138), じゃがいも(174・175), おたまじゃくし(221・222・223), かまきり(229・230), かたつむり(236・237・238), ほうほう(298・299) なお, 「まぶしい」は, 30・31で「マブシイ」となる地点を調べた。

記号が無い地点等は, 目視と, 国立国語研究所の『『日本語地図』データベース』を参照し, 回答の有無, 回答語形を確認した。なお, LAJはインターネットでの公開資料を用いた。

## §2 対象項目

本稿で扱う項目は, 河西(1981)から, まず当該地域内調査地点285地点の資料が揃う56項目(「しもやけ・湖東」「せきれい・丹後」各1地点押印無)を選んだ。これは, 地域内で2地点のみとなる項目があり, %での分析が不適当になると考えたためである。次に, ほ

ぼ全域が同回答(標準語形もしくは非標準語形)の6項目を除外することにした。本稿が対象とする地域におけるこれらの6項目の標準語形分布率を表1に示す。

表1 対象外項目と対象地域内での標準語形分布率

項目	%	項目	%
106顔	98.9	182とうもろこし	0.7
37甘い	95.1	102つむじ	0.4
36焦げ臭い	92.6	286やのあさって	0.4

これらは前述56項目のうちで, 標準語形分布率が90%以上もしくは1%未満の全項目である。統計的な指標を確認するため, 上記の6項目について56項目を対象とした標準語形回答地点数に対する偏差値を表2に示す(「平均114.4(地点), 標準偏差89.12364」)。

表2 対象外項目の標準語形回答地点数偏差値

項目	偏差値	項目	偏差値
106顔	68.8	182とうもろこし	37.4
37甘い	67.6	102つむじ	37.3
36焦げ臭い	66.8	286やのあさって	37.3

以上を経て, 表3に示す50項目を分析対象とする。

表3 調査対象項目(\*複数地図の場合は最初のNo.)

No. 項目	No. 項目	No. 項目
30まぶしい*	145おてだま	229かまきり
38<塩味が>うすい	147おにごっこ	236かたつむり
39しおからい(鹹)	148かくれんぼ	237なめくじ
41すっぱい	168うるち(粳米)	242どくだみ
50いくら(値段)	171もみがら(籾殻)	244つくし(土筆)
58にる(煮る)	172ぬか(糠)	245きのこ(茸・蕈)
69かぞえる(数)	174じゃがいも*	247まつかさ
97こおる(手拭い)	178さつまいも	250とげ(刺・棘)
112ものもらい	180かぼちゃ(南瓜)	254つゆ(梅雨)
116くちびる(唇)	187あぜ(畦畔)	261こおり(氷)
118つば(唾)	190かかし(案山子)	262つらら(氷柱)
119よだれ(涎)	211もぐら(土竜)	264つむじかぜ
124くすりゆび	213せきれい(鶴鶴)	269におい(悪臭)
127しもやけ(凍傷)	217うろこ(鱗)	276おととい
129かかと(踵)	221おたまじゃくし	285しあさって
137おんな(女)*	224とかけ(蜥蜴)	298ほうほう(梟)*
143たこ(鰐)	228まむし(蝮)	合計 50項目

## §3 考察

旧国・地域ごとの調査地点数を図1と表4に示す。大和, 近江, 紀伊は, 前述のように下の設定をした。

・大和(奈良県)は奈良盆地(国中)と吉野に分け, それぞれ大和・吉野とする(調査時点の行政単位)。

- ・近江(滋賀県)は湖北・湖東・湖南・湖西に分類して扱う。調査時点での滋賀郡域は湖西とする。
- ・和歌山県(紀伊)は紀北・紀中・紀南に分類して扱う。和歌山県の飛び地である北山村は南紀として扱う。なお、旧紀伊国のうち、現在の三重県に属する地域は「紀勢」として地域を設ける。

表4 国域(旧国・地域)ごとの調査地点数

国域・地点	国域・地点	国域・地点	国域・地点	国域・地点	国域・地点
摂津	15	湖北	7	但馬	19
河内	5	湖東	9	丹波	21
和泉	7	湖南	9	播磨	30
山城	8	湖西	6	淡路	9
大和	15	丹後	12	紀北	12
吉野	8	若狭	11	紀中	11
				合計	285

分析対象とした50項目について、「旧国・地域」ごとの標準語形回答数・分布率を次頁の表5に示す。

右の表6は表5の結果から旧国・文化圏の地域ごとに標準語形分布率をまとめたものである。

表5に示した地域ごとの標準語形回答数・分布率を河西(1981)と比較してみたい。複数の県・府にまたがる摂津・丹波は、県・府に分割した分布率も示す。なお、紀勢は紀伊の一部であるが三重県として比較し、また、若狭のみの資料ではあるが福井県と比較する。

県・府単位での比較は、三重県域以外は河西(1981)の数値を下回り、特に以下3県では県域の平均値において5%以上の差が見られる。

- 奈良県(大和・吉野) : -5.9%
- 和歌山県(紀北・紀中・紀南) : -5.6%
- 滋賀県(湖北・湖東・湖南・湖西) : -5.4%

本稿では扱わなかった32項目の標準語形分布率が一因であろうと考えるが、別途精確な検証が必要である。

「§0はじめに」で述べた、都道府県単位と、旧国・文化圏単位との比較において、どのような違いがあるのか、表6から考察してみたい。

表6から、本稿50項目について、福井県以外の県・府ごとに地域差の大きい順(最大値-最小値)に並べてみると、県・府内での地域差の大きさがわかる。

- 兵庫県 : 10.5%(播磨-但馬)
- 大阪府 : 7.3%(摂津-河内)
- 滋賀県 : 7.3%(湖南-湖北)
- 三重県 : 6.3%(伊勢-紀勢)
- 京都府 : 4.0%(丹後-丹波)
- 和歌山県 : 3.9%(紀北-紀中)
- 奈良県 : 1.7%(吉野-大和)

表6 河西(1981)との比較(右端( )は両者の差)

河西(1981)		本稿の地域, 県・府平均			
大阪府	40.9%	和泉		34.6%	
		河内		33.6%	
		摂津	40.7%	40.9%	
兵庫県	41.7%			40.5%	
		播磨		42.3%	
		但馬		31.8%	
		淡路		36.0%	
		丹波	40.5%	36.0%	
京都府	47.3%	山城		41.9%	
				45.8%	
		丹後		45.9%	
滋賀県	44.7%	湖北		34.9%	
		湖東		39.0%	
		湖南		42.2%	
		湖西		41.0%	
奈良県	37.8%	大和		31.3%	
		吉野		33.0%	
和歌山県	43.6%	紀伊	37.6%	紀北	39.0%
				紀中	35.1%
				紀南	38.9%
				紀勢	36.2%
三重県	40.6%	伊勢		42.5%	
		伊賀		39.2%	
		志摩		42.3%	
福井県	46.7%	若狭		45.6%	
全体平均	42.9%	全体平均		39.1%	

兵庫県は、国立国語研究所(2001~2008)の例で言及した通り、県内の方言差が大きい。兵庫県の方言は、研究者によって多少の名称・地域の異なりがあるものの、東条(1954)、楳垣(1962)、鎌田(1979)、鏡味明克(和田・鎌田(1992))等において、但馬を中国方言域とし、おおむね次のようにとらえられている。

- ①兵庫県方言は、まず但馬とそれ以外に分かれる
- ②但馬以外を、淡路とそれ以外に分ける
- ③但馬・淡路以外は、丹波・摂津・播磨とする

表6は、標準語形分布率という観点からではあるが、先学諸氏の説を裏付ける。表6から兵庫県の5地域それぞれについて、標準語形分布率の低い順に並べ、表7に示す(摂津・丹波は兵庫県内地点のみ計数)。

方言区画研究は、井上(2001)等、計量的根拠によるものもあるが、従来は主観的区画案が多くみられた。表7は、わずか50項目94地点のデータではあるが、単純な数値をみても、これまでの諸家の兵庫県方言区画が適切なものであることを確認した。一方で、この結果から筆者は上記①~③の区画案を改め、「②'和歌

表5 項目・地域別 標準語形回答数

項目	地域 地点数	摂津	河内	和泉	山城	大和	吉野	湖北	湖東	湖南	湖西	若狭	丹後	丹波	但馬	播磨	淡路	紀北	紀中	紀南	伊勢	伊賀	志摩	紀勢	合計
30まぶしい	1	0	0	2	1	0	1	0	2	0	0	5	1	9	5	1	1	0	0	0	0	0	0	1	30
38(塩味が)うすい	0	1	1	2	14	4	0	1	1	0	1	0	1	1	1	0	0	11	7	7	2	3	1	1	59
39しおからい	3	1	1	5	6	3	2	0	3	3	2	1	2	0	0	1	0	0	3	3	1	4	0	4	44
41酸っぱい	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0	1	0	1	2	1	2	0	13	
50いくら	1	0	0	0	1	1	4	3	2	2	3	0	2	1	1	0	5	9	17	30	2	6	8	98	
58煮る	3	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	2	6	4	12	3	0	0	0	7	0	1	1	42	
69数える	8	1	2	5	4	2	3	6	2	3	5	6	9	5	16	1	4	2	12	12	2	2	4	116	
97(手拭い)かゝる	3	0	1	1	2	7	1	5	1	1	9	5	2	0	3	7	11	10	17	14	2	3	8	113	
112ものもらい[麦粒腫]	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	1	6
116唇	11	4	5	7	8	3	3	5	9	3	8	7	14	11	18	4	5	3	9	14	3	3	1	158	
118つば[唾]	8	2	3	3	1	4	2	5	4	6	3	7	7	1	6	2	6	2	13	29	2	4	9	129	
119よだれ[涎]	14	5	7	8	14	6	7	9	9	6	11	8	21	7	30	8	10	9	3	31	5	6	7	241	
124葉指	5	1	1	1	2	2	0	1	1	1	6	3	5	4	7	1	4	3	3	17	2	2	4	76	
127しもやけ	14	4	4	8	14	7	1	1	8	5	2	9	19	9	28	7	8	7	8	31	5	6	8	213	
129かかと	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	4	
137女	6	0	2	3	5	2	0	2	3	1	4	6	5	2	7	2	1	0	2	7	1	4	6	71	
143胤	1	1	2	2	3	5	5	2	1	2	9	5	13	7	15	3	10	10	17	25	5	6	8	157	
145お手玉	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1	8	
147鬼ごっこ	2	3	0	1	0	2	2	2	3	2	7	2	6	3	10	0	3	1	8	6	1	1	3	68	
148隠れんぼ	15	5	5	8	14	6	7	9	9	4	11	12	20	14	30	3	7	4	17	28	5	3	8	244	
168うるち[米]	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	2	1	0	0	0	0	8	
171もみから[粉殻]	6	0	0	2	0	4	1	5	4	0	3	4	4	3	9	4	3	1	10	9	0	0	4	76	
172ぬか[糠]	14	5	7	8	15	5	1	2	4	5	5	11	15	17	29	9	11	10	18	19	2	6	9	227	
174じゃがいも	12	3	4	6	4	3	3	6	7	3	9	5	2	10	22	7	7	8	16	20	2	6	8	173	
176さつまいも	14	5	7	7	15	8	7	9	9	6	11	9	20	10	27	5	11	11	19	27	5	2	9	253	
180かぼちゃ	9	0	1	8	9	1	7	9	9	5	10	12	20	15	21	1	2	5	15	30	5	5	7	206	
187あぜ[畦]	13	5	6	7	14	6	6	9	9	6	11	11	13	17	24	9	9	9	17	31	5	6	10	253	
190かかし[案山子]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	5	
211もぐら	1	0	2	2	0	0	0	0	1	0	2	3	4	1	13	1	0	2	3	4	0	2	0	41	
213せきれい	4	0	1	1	2	2	3	6	4	4	6	6	2	0	7	4	2	2	5	17	0	1	1	80	
217うろこ	15	5	7	8	15	7	6	9	9	6	10	11	20	15	29	9	12	11	5	26	5	2	2	244	
221おたまじゃくし	5	1	0	5	3	3	3	5	2	4	4	0	10	4	14	3	5	3	11	15	2	2	2	106	
224とかげ	4	1	2	2	0	5	1	0	1	2	1	5	2	3	27	5	2	1	7	2	0	2	4	79	
228まむし	3	1	1	2	0	1	3	7	7	3	6	12	11	17	4	1	0	0	1	29	2	6	2	119	
229かまきり	12	5	7	8	9	2	4	6	9	5	5	6	14	4	15	3	11	8	17	29	5	5	7	196	
236かたつむり	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	4	4	1	4	3	2	1	2	4	7	0	2	2	42	
239なめくじ	9	0	1	1	0	0	1	2	0	2	3	4	8	3	19	2	3	3	1	6	0	3	5	76	
242どくだみ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	2	4	2	5	0	0	0	0	2	0	0	0	19	
244つくし	2	2	3	4	4	0	2	1	2	2	2	0	1	4	7	4	3	1	10	3	1	2	3	63	
245きのこ	4	0	1	2	0	1	3	1	3	2	4	5	6	1	1	0	4	2	2	0	1	0	3	46	
247まつかさ	0	0	0	2	0	0	1	4	6	1	10	11	18	6	15	6	0	0	0	22	4	4	3	113	
250とげ(いぼら等)	7	2	2	4	2	0	1	2	3	2	7	7	9	3	7	2	1	0	2	9	0	3	0	75	
254梅雨	14	5	7	8	15	4	7	8	8	6	11	12	21	19	30	8	12	10	5	20	3	3	2	238	
261氷	14	4	6	5	6	8	6	9	9	6	10	12	20	18	30	8	12	11	19	22	4	5	6	250	
262つらら	15	5	6	8	15	8	2	4	7	3	6	12	17	13	27	8	10	11	14	18	4	1	1	215	
264つむじ風	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	2	2	0	1	1	2	0	0	1	0	0	0	14	
269におい(悪臭)	4	0	0	5	1	2	1	1	3	1	2	4	14	2	9	3	4	2	4	9	0	3	4	78	
276おととい	4	0	1	2	0	0	3	3	1	0	4	1	3	5	15	4	3	0	5	4	1	0	2	61	
285しあさって	13	4	7	7	9	5	7	9	8	6	11	12	20	13	27	8	12	11	17	2	4	0	3	215	
298ほうほう(梟の鳴声)	8	3	5	8	8	2	2	6	4	0	7	9	9	7	13	3	3	1	4	12	2	1	2	119	
地域計	305	84	121	183	235	132	122	175	190	123	251	275	425	302	634	162	234	193	370	658	98	127	181	5580	
総地点数 x50	750	250	350	400	750	400	350	449	450	300	550	599	1050	950	1500	450	600	550	950	1550	250	300	500	14248	
地域%	40.7	33.6	34.6	45.8	31.3	33.0	34.9	39.0	42.2	41.0	45.6	45.9	40.5	31.8	42.3	36.0	39.0	35.1	38.9	42.5	39.2	42.3	36.2	39.2	
地域	摂津	河内	和泉	山城	大和	吉野	湖北	湖東	湖南	湖西	若狭	丹後	丹波	但馬	播磨	淡路	紀北	紀中	紀南	伊勢	伊賀	志摩	紀勢	合計	

湖東:「しもやけ」1地点押印データなし

丹後:「せきれい」1地点押印データなし

表7 兵庫県地域別標準語形分布率(低い順)

地域	標準語形分布率
但馬	31.8%
淡路	36.0%
丹波	36.0%
摂津	40.5%
播磨	42.3%

山・徳島の影響がみられる淡路と、京都の影響がみられる丹波を他と分ける, 「③」 摂津と播磨を分ける

ととらえ直すこともできるであろうと考える。

表6にもどり、兵庫県以外の県・府を概観し、注目される点についてまとめておく。

京都府について。丹後方言は、兵庫県の但馬と同じく、日本の方言区画においては「中国方言」とされるが、50項目の分布率は山城とは0.1%差で、京都府丹波よりも4%高くなっている。そのような結果になった原因として次のような例を挙げることができる。

まむし:丹後12/12, 山城 2/8(HAME=6)  
「まむし」は山城北部にマムシが2地点みられるもの

の、それ以外は関西中南部に広がるハメが多く、両者の境界線の一部が山城にあると言える。

松かさ：丹後11/12地点，山城 2/8(CI(N)CIRO=3，MACUBOKKURI=1，CINCIKURI(N)=1，KANKORO=2(MACUKASA 併用1)地点「まつかさ」では、丹後の1地点はKANKOROであった。山城は摂津・大和・紀伊に広がるチンチロ系と、播磨・丹波・丹後・若狭に連なるマツカサとの境界線にあたり、山城独自のカンコロは両者の緩衝地帯に発生した「第三語形」のようにみえる。徳川・グローターズ(1976)の『夷隅川流域方言地図』における「松かさ」の方言形「マツコゾー」を連想させ、興味深い。

大阪府は、河内5地点，和泉7地点，摂津7地点(全域では15地点)である。河内・和泉の地点数が少ないことは、やや信頼性が低くなるが、両者間の差は1%で、大阪府摂津とはそれぞれ7.3%，6.3%低くなっている。ただし、京都府にみられたような極端な差を見せる例は少ない。「におい(悪臭)」は、摂津全域でみると4，河内・和泉がそれぞれ0となっているが、摂津の3地点は兵庫県での回答であり、大阪府は1地点のみである。なお、NIOIとの聞こえが近いNIYOIは、大阪府摂津2，和泉1となっている。

滋賀県は、株垣(1962)，真田(2018)等にあるように、湖北地方が、まず他地域と区画される。その要因の一つはアクセントであり、LAJと関連する資料ではないが、表6から他地域との異なりが見える。湖北以外3地域平均は40.7%であり、5.1%低い。湖東とは4.1%，京都方言色が強いとされる湖南とは7.3%の差がある。地域差が顕著な項目に、「しもやけ」がある。特に、シモヤケは、湖北1/7，湖東1/8(1地点欠)，湖南8/9，湖西5/6である。一方、30地点のうち南西部以外の23地点にユキヤケがみられ、それらのうち、シモヤケとの併用回答は、湖西2/3，湖南4/5に対し、湖北1/7と湖東1/8とほとんどがユキヤケの単独回答である。「しもやけ」の方言が、雪深い地方とそうではない地方でユキヤケ/シモヤケの対立を見せることは、全国の方言分布の「日本海型」とも呼ばれる一例である。滋賀県内にその境界があり、湖北・湖東は日本海型地域、湖南は太平洋型地域、湖西は融合地域と言えよう。このように、琵琶湖を中心に滋賀県は、湖北に加え、かつての都に近く多くの影響を受けてきた湖南と、それ以外の湖東・湖西との間には、本稿で設定した「文化圏」が明確に存在すると言えよう。

河西(1981)で最も注目すべきは、奈良県の数値37.8%，全国都道府県27位である。関西は一千年の都

があったところであり、首都圏に次いで標準語形の率が高い地域である中で、予想外の数値であった。本稿の資料分析を始める前は、吉野の数値が低く、県域全体の数値を下げているのではないかと予想を立てていた。しかし、前々頁で示したように、県・府内の地域差が最も小さいのが奈良県であり、1.7%とはいえ、標準語形分布率においては、逆に吉野は大和(国中)を上回っていた。本稿の目的であった「都道府県」単位と「旧国・文化圏」単位との結果の相違について、奈良県は予想が外れ、国中・吉野いずれも標準語形の分布率は低く、県内に地域差の無いことがわかった。

旧紀伊国は、和歌山県全域と三重県に及ぶ。前述の通り、河西(1981)との比較がしやすいように、三重県の旧紀伊国域は「紀勢」として三重県で扱うこととする。和歌山県における紀北・紀中・紀南の3地域の結果は、交通の便などにおいて関西圏からも中京圏からももっとも遠い紀中が、わずかではあるが低い値となった(鳥取県の中央に位置する倉吉が関西、山陽いずれからの影響も受けにくい状況にあることと類似する)。ただし、3地域は3.9%の範囲内に収まり、また、三重県に分類した紀勢を加えた旧紀伊国4地域は37.6%であり、地域間には大きな差がない。

三重県も、伊賀5，志摩6，紀勢10，伊勢31と、地点数の均衡を欠く(1873年末の国域による)。紀勢以外の3国の平均分布率が42.0%に対し、紀勢は36.2%と5.8%の差がひらいた。なお、「うろこ」については真田(1979)にあるように、志摩以南にみられるハザ・ハダは、県内のみならず、関西・中国・四国において独特な分布を見せている。

福井県については、越前の資料も扱うべきか、対象から除外すべきか迷った。しかし、真田(2018)の編集過程や筆者自身の臨地調査経験に基づいて、今回のように若狭のみを扱った。河西(1981)の全県域データ46.7%に比べ、本稿は45.6%と、1.1%の差であり、その結果からは、若狭と越前という旧国間における標準語形分布率には、特筆すべきような大きな差はみられないと考えられるであろう。

#### §4 まとめ

次頁の図2は、全50項目に対する標準語形回答語数(35~10語、回答数34語は無)の地点数分布である。

地点ごとに見ると、図2のように、やや正規分布からずれた形になるが、標準語形回答語数の偏差値(SS)を求め(平均語数19.6，標準偏差4.8224)，その値

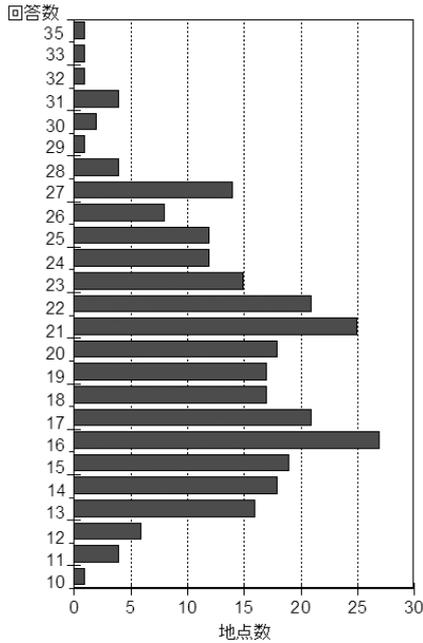


図2 標準語形回答語数ごとの地点数

から5段階を設定し、記号を与えたのが表8である。

表8に基づいて、各地点に記号を与えたのが次頁の図3である。

図3では、回答語数に応じた記号を用い、最も少ないグループは線記号(|)を意図するものとした。

「等語線」のようなきれいな境界線を引くことはできないが、濃く、大きな多角形がどこに多いかは見て取れる。逆に、それらが見られない地域も同様で、地図からは、標準語形回答数の多・少がよく見える。

- ・山城・湖南での「多い」地点
- ・播磨に点在する「多い」地点
- ・丹後・若狭での「多い」地点
- ・紀伊半島の伊勢・志摩以外での「少ない」地点
- ・大阪府域(摂津・河内・和泉)での「少ない」地点

表9として、各地域ごとの標準語形分布率(%)と偏差値(SS)を示す(平均38.8(%の平均のため表5の39.2からズレが生じる)%, 標準偏差4.34399)。

表9に基づいて作成した次頁図4は、標準語形分布率(%)による区分も考えたが、平均値以外に数値の区切りに根拠が見出しにくいので、ここでも各地域の分布率偏差値を求め、下のように4つに区分した。

- I：平均を大きく上回る地域
- II：平均を上回る地域
- III：平均値に近いもしくは下回る地域
- IV：平均を大きく下回る地域(Iに応じて2地域)

この区分に基づき、旧国・文化地域ごとの標準語形分布率によって図4として地図化した。なお、図3では

表8 各地点標準語形回答語数・偏差値と記号

	数	SS	数	SS	数	SS	数	SS	数	SS
記号	★		◆		▲		●			
回答語数と偏差値	35	82.0	29	69.5	24	59.2	19	48.8	14	38.4
	33	77.8	28	67.5	23	57.1	18	46.7	13	36.4
	32	75.8	27	65.4	22	55.0	17	44.7	12	34.3
	31	73.7	26	63.3	21	53.0	16	42.6	11	32.2
	30	71.6	25	61.3	20	50.9	15	40.5	10	30.2
計	9地点		39地点		91地点		101地点		45地点	

表9 標準語形分布率による地域区分

区分	地域	%	SS
I	丹後	45.9	66.4
	山城	45.8	66.2
	若狭	45.6	65.8
II	伊勢	42.5	58.6
	播磨	42.3	58.2
	志摩	42.3	58.2
	湖南	42.2	57.9
	湖西	41.0	55.2
	摂津	40.7	54.5
	丹波	40.5	54.0
III	伊賀	39.2	51.0
	湖東	39.0	50.6
	紀北	39.0	50.6
	紀南	38.9	50.3
	紀勢	36.2	44.1
	淡路	36.0	43.7
	紀中	35.1	41.6
	湖北	34.9	41.1
	和泉	34.6	40.4
IV	河内	33.6	38.1
	吉野	33.0	36.7
表9の平均		38.8	

地点ごとの特性を表わすために5段階としたが、図4での地域区分とは関連が無いものと考え、図4は4区分とした。

表9・図4では、大和、丹後・若狭が例外的な存在となるが、山城を中心とした「周圏分布」に近い様相を示す。河西(1981)では全国的には首都圏を中心とする周圏分布がみられるが、さらに分析を深めた河西・真田(1982)、真田(2001)等では、首都圏に次いで関西圏にもう一つの周圏分布が見られ、関西のことが標準語の基盤となっていることの裏付けとしている。その点から、改めて図4を見ると、奈良時代の都であり近畿の中央部に位置する大和(奈良県北部)の標準語形分布率の低さが際立っている。その一方で、丹後・若狭という周辺地域の値が高く、大和とは逆の意味で、

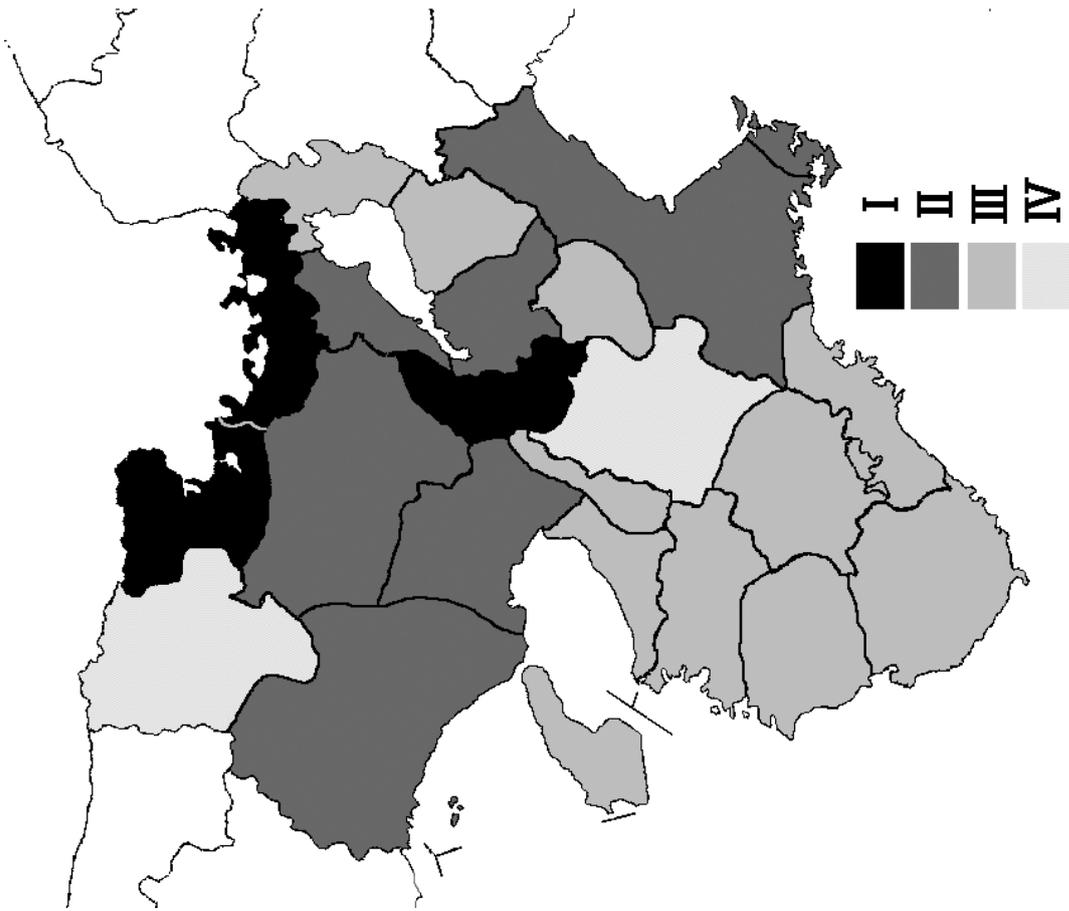


図4 標準語形回答率による区分(県・府境界, 旧国・文化域境界)

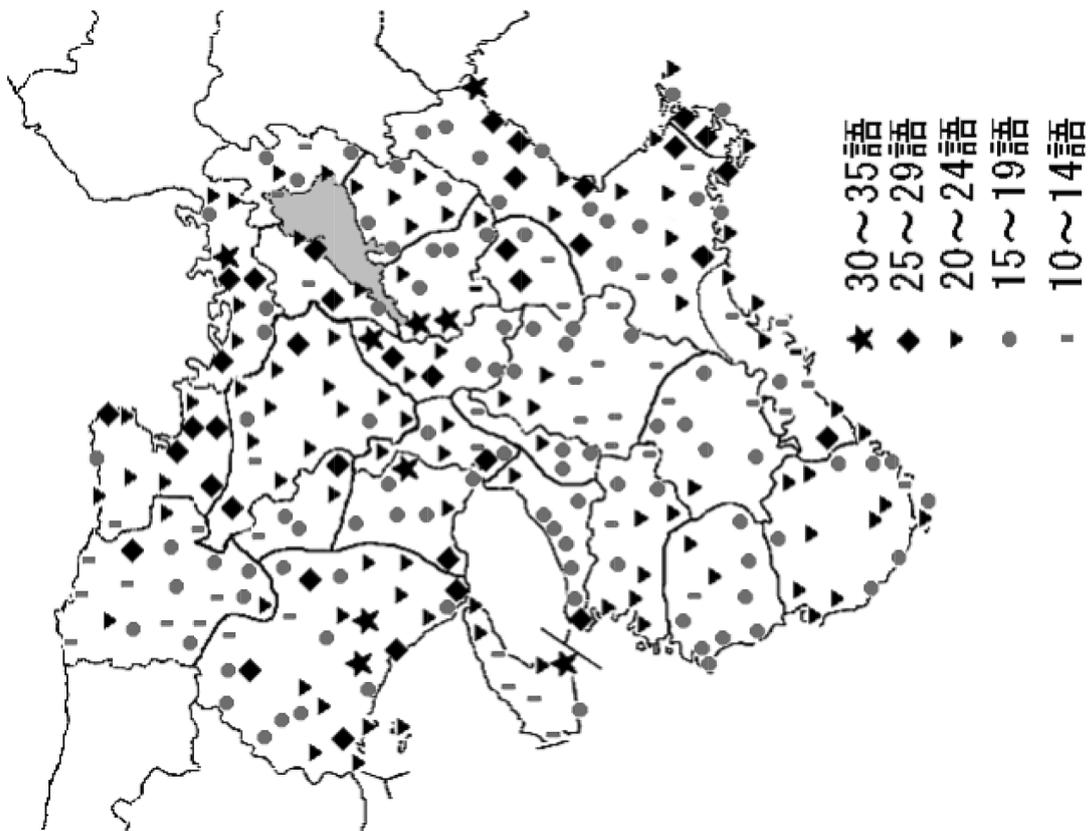


図3 地点別標準語形回答数(県・府境界, 旧国・文化域境界)

意外な結果となった。また、湖東・伊賀よりも、伊勢・志摩の方が分布率が高いことも注目される。表9で平均値を超えていることから、伊賀・湖東・紀北・紀南を区分Ⅱにすることも考えられるが、丹波との偏差値の差からこのような判断に至った。ただし、この結果はあくまで平均的なものであり、どの項目が標準語形で回答されたのか、綿密な分析が必要であろう。

以上、図3・図4が本稿の総括となる。

ここまで見てきたように、関西では奈良や和歌山など、地域差が小さい県・府もみられるが、筆者が経験的に直感していたように、兵庫県が県内差の大きい典型的な例であった。本研究を通して、やはり、都道府県を単位とする方言研究においては、何を根拠資料とするのかによって、その扱いには慎重になるべきであると言えよう。

本稿で扱った地域では他項目の場合はどのような結果を見せるであろうか。また、これまで臨地調査を経験してきた中国地方、たとえば島根県の出雲と石見、鳥取県の因幡と伯耆、岡山県の備前・備中に対する美作など、他県・地域ではどのような結果が得られるであろうか。自身では臨地調査経験の少ない九州各県・旧国を含め、次なる研究課題としたい。

#### 参考文献

- 井上史雄(2001)『計量的方言区画』明治書院  
井上史雄・河西秀早子(1982a)「標準語形による方言区画」『計量国語学』13-6  
井上史雄・河西秀早子(1982b)「標準語形の地理的分布パターン—「日本言語地図」データの因子分析」『国語学』131  
榎垣実編(1962)『近畿方言の総合的研究』三省堂

- 鏡味明克(1992)「方言区画」『ひょうごの方言・俚言』(和田・鎌田編)所収 神戸新聞総合出版センター  
河西秀早子(1981)「標準語形の全国的分布」『言語生活』354(1981年6月号) 筑摩書房  
河西秀早子・真田信治(1982)『『日本言語地図』による標準語形の地理的分布』『日本語研究』5 東京都立大学国語学研究室  
鎌田良二(1979)『兵庫県方言文法の研究』桜楓社  
国立国語研究所(1966~1974)『日本言語地図』(全6集) 大蔵省印刷局  
国立国語研究所(1981~1985)『日本言語地図』(全6集) (縮刷版), 大蔵省印刷局  
[https://mmsrv.ninjal.ac.jp/laj\\_map/](https://mmsrv.ninjal.ac.jp/laj_map/)(2021.6.6.入手)  
国立国語研究所(2001~2008)『日本のふるさとことば集成』(全20巻), 国書刊行会  
真田信治(1979)「標準語の地理的背景」(徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書 第5章)  
真田信治(2001)『標準語の地理的背景』PHP文庫  
真田信治監修(2018)『関西弁事典』ひつじ書房  
東条操(1954)『日本方言学』吉川弘文館  
徳川宗賢・W.A. グロータース(1976)『方言地理学図集』秋山書店(言及した地図の出典について同書は阪倉篤義(1975)『国語学概説』有精堂としている)

#### 謝辞

- L A Jに記号抜け・重複等が見える場合、確認には国立国語研究所・熊谷康雄氏による「『日本言語地図』データベース」を利用させていただいた。  
(<https://www.lajdb.org/TOP.html>(2021.8.15.取得))  
記して感謝申しあげる。
- 河西秀早子氏は、筆者の大学同級生である。河西氏の研究に刺激を受け、また、筆者自身も調査経験を重ね、旧国・文化圏での分析を考えるようになった。河西氏の「旧国単位での分析は考えなかった」という一言から本稿の構想が始まった。末尾になったが、記して感謝申しあげる。